

伝『探幽筆 三拾六哥仙』の画像データベース化と原本復元

伊藤 鉄也

大阪明浄女子短期大学

"PORTRAITS DES TRENTE-SIX GRANDS POÈTES JAPONAIS"と題する、背皮洋装本がある。これは、江戸時代の『探幽筆 三拾六哥仙』の(紛本) (原画の模写)を、フランスで改装した画集である。切断された36枚の歌仙絵は、もとは卷子本であったことがわかった。また、各絵の配列順も復元できた。

本発表では、パーソナル・コンピュータを活用して絵巻を復元する過程を報告する。また、小野小町と在原業平については、画中に書き込まれた着色の指示をもとにして、コンピュータグラフィックを活用した彩色復元も試みる。

Graphic Database and restoration of the originals
of "Portraits of Thirty-six Great Japanese Poets"

Itou Tetuya

Osaka Meijo Women's College

1216-1, Okubo, Kumatori-cho, Sennan-gun, Osaka 590-04, Japan

Here we have a book bound in leather, titled "PORTRAITS DES TRENTE-SIX GRANDS POÈTES JAPONAIS". It's a collection of sketches, which are copies of "Portraits of Thirty-six Great Japanese Poets" drawn by Tanyu in Edo-period. This was rebound in France. The portraits consisting of 36 separated pieces have turned to be a scroll. The sequence of them has also been restored.

In this announcement, the process of restoring the scroll by using a personal computer is reported. In addition to that, in terms of "Ono-no Komachi" and "Ariwara-no Narihira", the reconstruction of the coloring of their portraits is made an attempt at by using the computer graphics.

1. はじめに

文学研究者で、パソコンを利用している人は多い。今はそのほとんどがワープロとしての利用であっても、いずれはパソコン通信やデータベースを活用・構築したいと思っておられるようである。

最近、コンピュータで利用できるデータの提供や、それを活用した索引の公表が相次いでいる。文学研究における本文資料の扱いが、ますます便利になっていくことを実感する。しかし、それらは語句レベルのものが大半である。画像データとして提供され、文学研究に役立つものはあまりない。パソコン通信に、いろいろな画像がアップロードされている。しかし、あくまでも趣味的なものがほとんどのようである。今後はCD-ROMの普及に伴ない、画像資料がさまざまな形で出回ることが予想される。文学関係の画像データも、その例外ではなからう。

私は、文学研究に必要なデータベースとして、次の3種類を考えている(注①)。

- ①一次資料のデータベース(作品本文のデータベース)
- ②二次資料のデータベース(研究文献や資料に関するデータベース)
- ③周辺資料のデータベース(作品に関連する資料・情報のデータベース)

本稿は、上記③に関するものである。平安時代の著名な歌仙の姿絵の模写をデータベース化し、それを通してわかったいくつかの事を中間報告するものである。扱う資料は、(八人会)所蔵の『探幽筆三拾六哥仙』である。これは、平成5年3月に筆者がパリの古書店で見かけ、それを(八人会)の協力によって入手できたものである。この資料を用いて、コンピュータを活用した原形態の復元と、コンピュータ・グラフィック上での着色復元を試みる。これを契機に、本書の原本か清書完成本が見つければ、という期待も抱いている。

以下では、今回設定されたテーマである〈画像データ処理〉というものを意識して、できる限り具体的に述べていくことにしたい。

2. 文学研究と画像データベースの現況

まず、文学研究におけるコンピュータ利用の現状を、私なりにまとめておこう。

コンピュータを活用した研究は、多方面でなされている。平安時代の文学作品とその受容史を研究テーマとする者にとって、各種の事例報告や研究成果は自分の研究法に多くの示唆を与えてくれる。コンピュータは、研究者の調査資料の整理だけでなく、思考・推論・実証・検証の道具として、着実にその有効性を認識されつつある。実に便利な情報処理機器であり、重宝する電子文具の一つである。

このように便利な機器なので、文学を研究対象とする仲間にも急速に普及して行くであろうと思ったのは、私だけではあるまい。そのような思いから、『新・文学資料整理術 パソコン奮戦記』(桜楓社)を出版したのは、昭和61年の秋であった。以来、『へぐり通信』・『人文科学データベース研究』・『源氏物語研究』の編集に携わりながら、コンピュータを活用した文学研究のさまざまなアプローチの実情を紹介してきた。しかし、大阪樟蔭女子大学を拠点として平成4年度より活動を開始した(西日本国語国文学データベース研究会)の運営を通して、身の状況があまり進展していないことに気付いた。講演や研究発表を依頼したり募集したりするために、候補者をリストアップしていた時のことである。

他の分野はともかく、自分が関心を持つ平安朝に関わる研究では、索引をはじめとする語学的研究に成果が認められる。しかし、文学的とされる研究では、あまりその活用事例が見あたらない。文学研究

だからこそ、情報処理機器の姿は論考の陰に隠れているのかもしれない。隠しておくべきものかもしれない。あくまでも、パソコンは文具の一つなのだから。しかし、その初期においては、さまざまな研究方法の開陳があってもよいのではなかろうか。パソコンにおけるワープロ機能の活用は活発になされていても、データベースを駆使しての研究発表は少ない。研究史を把握するために、研究論文目録の一覧表を作成するあたりが、ワープロから次のステップへ展開した一般的な利用形態のようである。

かくいう私も、そんなに多様な活用をしているわけではない。画像に関連したものは、〈データベース・平安朝日記文学資料集〉第2巻の『蜻蛉日記』（平成3・6、同朋舎）がある。これには、本文のテキストデータベースに加えて、問題となる本文の影印画像（1053枚）を表示できるようにしている。『蜻蛉日記』は欠陥本文が多いので、底本とした写本の影印画像は、推測本文を考える上で有効な映像資料となるはずである。

藤原定家が書写した『更級日記』の変体仮名の影印文字を、パソコンに自動的に翻刻させる試みも行った。墨書き文字を読み取って翻字すると同時に、仮名の字母に変換することもできるものである。定家の筆跡を収めた変換用辞書も、画像データベースの一つといえよう。大阪短期大学協会主催国語国文研修会（平成4年10月3日・於大阪明浄女子短期大学）と西日本国語国文学データベース研究会（平成4年12月6日・於大阪樟蔭女子大学）でデモンストレーションを行なった（EPSON PC-386版）。両会共に、当日は（絵と音で読む『源氏物語』（FM-TOWNS版））と〈定家筆跡の画像集（Macintosh版）〉の実演も行なわれた。

文学研究と画像データベースに関わるものが、もう一つある。それは、伊井春樹氏が提示された〈古典文学総合事典データベース〉である。これは、作品中の語句に分類番号を付し、それと画像データとをリンクさせたものである。ことばの背後や行間には、夥しい文化や歴史がある。パソコンを活用してそれを掘り起こしながら、自分なりに読み進むことができるようにするものである。〈「国文学とコンピュータ」シンポジウム〉（平成5年12月9日・於国文学研究資料館）で、その一部が公開されることになっている。まさに、マルチメディア版の『古事類苑』である。

これ以外にも、各人が新しい試みをいろいろとなさっているはずである。今は、一つでも多くの事例発表を待ちたい。文学とパソコン、それも画像データを取り扱った研究は緒に就いたばかりである。本発表は、そうした状況におけるささやかな事例報告となるものである。

3. 『探幽筆 三拾六哥仙』の配列復元

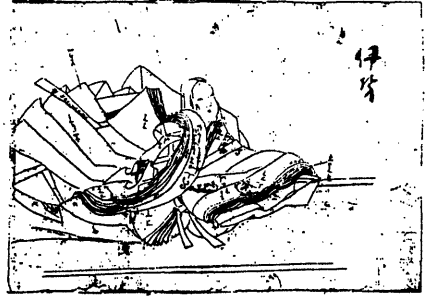
『探幽筆 三拾六哥仙』の歌仙絵36枚は、今はA3版より一周り大きい背皮洋装本に収められている（注②）。しかし、これは和装本の改装であることは、一見してわかる。その原形は、卷子本・折本・冊子本のいずれかである。これは、虫損を調べることによって明らかになる。

平安女流歌人の伊勢と万葉歌人の山辺赤人における、上部下部にある虫損と切り口の断面と墨汚れが、それを確定する材料を与えてくれる（図①②）。

伊勢の本紙左側には、5mm幅で同質の和紙が下貼りされている。これは、伊勢の次に別の歌仙絵が継ぎ合わせてあり、それがこの継ぎ目で切断されたことによって取り残されたものなのである。伊勢の本紙左端を剥がしてこの残存紙を見ると、その左上端部に墨の線が確認できる（図③）。この墨跡を手がかりにして他の歌仙絵を調べると、山辺赤人の右上に墨の線があるのが見つかる（図④）。この二つを接合すると、墨が描く弧がつながるのである。つまり、伊勢の次には山辺赤人が続いていたことになる。



〈図②〉



〈図①〉

つぎに、伊勢の本紙を丹念に見ると、いくつかの虫損が確認できる。上から41mmと42mmの位置に145mmと143mmの間隔で虫損が三つある。伊勢に続く山辺赤人には、上から42mmと43mmの位置に二つの虫損が143mmの間隔で並んでいる。伊勢の左側の虫損は左端から9mmの位置に、山辺赤人の右側の虫損は右端から134mmの位置にあるので、伊勢から山辺赤人へと続く虫損の間隔は143mmとなる。つまり、現状は両紙が切断された時のままの状態を表装されていることがわかる。伊勢から山辺赤人へと続く五つの虫損は、145mmと143mmであった。また、伊勢の本紙の下から24mmの位置に167mm幅で虫損が二つ、山辺赤人の下から24mmの位置に166mm幅で虫損が二つある。伊勢から山辺赤人に跨がる虫損の間隔は、 $[63\text{mm} + 103\text{mm} = 166\text{mm}]$ となり、これも一連のものということになる。

虫損が等間隔であることから、これがもとは卷子本であったことが確認できる。ただし、この虫損が、上と下のものが同時に生じたものでないことは、それぞれの間隔が違うことからわかる。巻物の形状で保管されていたが、巻かれ方のちがう二つの時期に虫に喰われた、ということになる。

伊勢の直前にあった歌仙絵については、紙の継ぎ合わせのシワと虫損の位置から、清原元輔であったこともわかった。同じ理由で、その直前は猿丸大夫。また、山辺赤人の左上端の墨汚れが記友則の右上の汚れと合致し、虫損もその延長上のものとなっているので、赤人の次は友則。以上から、猿丸大夫→清原元輔→伊勢→山辺赤人→記友則という配列順が判明した。このようにして、他の歌仙絵もそのすべての接続順がわかった。実は、これは本書に添付されていたフランス語のメモ書きにあった歌仙配列順と、完全に一致するものであった(注③)。

なお、記友則の左下には、本紙と裏打ち紙との間に波文の断片が貼り込まれている(図⑤)。これは、上記の手順で判明した配列順でいうと、巻頭の平兼盛の左下に相当する破片なのである(図⑥)。



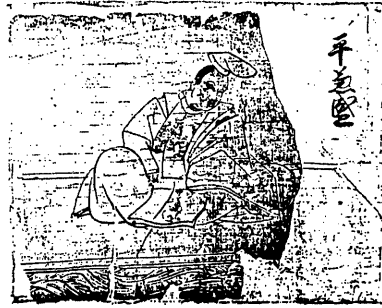
〈図④〉



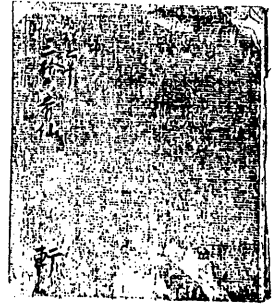
〈図③〉



〈図⑤〉



〈図⑥〉



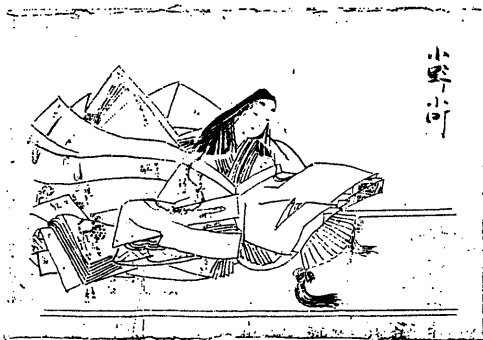
〈図⑦〉

なぜ巻頭部にあった平兼盛の破片が記友則のところのところに貼り込まれていたのか、今は不明としておく。平兼盛の右側が破損しているのは、平兼盛が表紙に繋がっていたためであろう。“PORTRAITS DES TRENTE-SIX GRANDS POÈTES JAPONAIS”の第1頁にあった『探幽筆 三拾六哥仙 軒』と記された表紙(図⑦)が、平兼盛に続いていたかどうかは、実際に切り口を合わせて見ればよい。卷子本であったことがわかっているので、パソコンの画面上で表紙を裏返しにして平兼盛に接合してみた。縦幅と切り口はほぼ一致した。

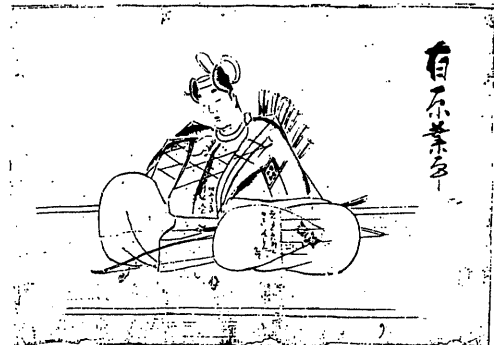
表紙に関する書誌的なことは別稿(注②)に詳述したので、今は省略する。ここでは、資料の形態調査にパソコンを使用することの利点をあげるに留めておく。表紙と平兼盛の事例が示す通り、台紙に貼り付けられた絵図をパソコンの鏡像処理によって左右反転させ、その切り口を別紙の切り口と接合するという手順は、コンピュータの活用ならではの検証といえよう。

4. 小野小町と在原業平の彩色復元

『探幽筆 三拾六哥仙』の36枚の歌仙絵のうちから、小野小町と在原業平を選び、色取りの指示通りに彩色し、衣文も指定のもので仕上げてみよう(図⑧⑨)。

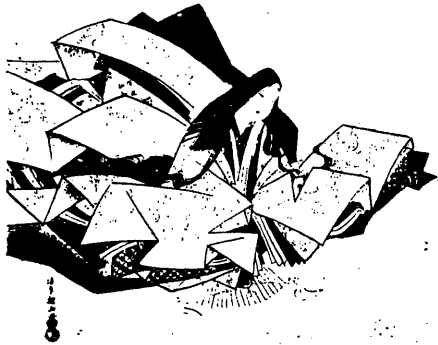


〈図⑧〉

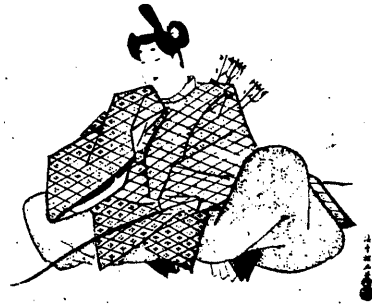


〈図⑨〉

彩色にあたっては、狩野探幽筆『百人一首手鑑』所収のものを参照した(図⑩⑪)。「百人一首手鑑」の小町と業平をコンピュータに取り込み、そこに用いられている色彩をサンプルカラーとして(八人会本)の小町と業平像に利用したのである。



〈図⑩〉



〈図⑪〉

なお、(八人会蔵本)が探幽筆とされていることの確認がとれていない。この問題はこれからの課題とし、ここでは伝称筆者名が探幽であることに留めておくことにする。

5. おわりに

改装された資料の原形を推測したり、制作過程を探求する場合には、パソコンは有効な文具となる。本稿は、そうした活用的一端を示したものである。パーソナルなレベルで、それも自宅のできることなのである(注④)。

近年私は、平安時代の文学に関連する映像・画像を、パソコンでデータベース化することを心掛けている。あくまでもパーソナルなデータベースであり、かつ実用的なものを目指しているので、第三者の利用環境は配慮していない。自分の研究のためのデータベースなので、資料としての画像に関連する著作権および所有権の問題は、今のところは回避している。しかし、近々深刻な問題として意識せざるをえなくなる予感がする。今回は、架蔵資料を用いたので、コンピュータと画像に関する諸権利をめぐる問題は表面化しなかった。これは、特別なケースなのであろう。膨大な画像データを用いた研究発表を行なう時は、事前にこの問題をよく勉強しておく必要がある。

本稿は、文学とその周辺の研究における、画像データの活用事例としてまとめたものである。パソコンがなくても考察はできたかもしれない。しかし、画像データベース化したものを活用することによって、さまざまな角度から資料の検討ができたのは確かである。データを並べ替えたり、変形したりして推論を構築していく研究対象にとっては、このコンピュータを利用することは、今後とも有効な手法となるはずである。

- (注①) 拙稿「源氏物語の情報処理——パーソナル・データベースの視点から——」(『源氏物語講座9』平成4・1、勉誠社)を参照願いたい。
- (注②) 『探幽筆 三拾六哥仙』の形態と制作過程に関する詳細な考察は、拙稿「八人会蔵『探幽筆三拾六哥仙』について」(『大阪明浄女子短期大学紀要 第八号』平成6・3)にまとめてある。
- (注③) 本書に添付されていた資料のうち、フランスの書店台帳と思われる紙片に万年筆で記された歌仙名一覧を列記しておく。カッコ内は鉛筆書きによる補入文字。大カッコはミセケチによる修正を示す。仏語表記の各歌仙名の後の日本語表記は、参考のために筆者が付したものである。
- 1 Taira(no)Kanemori 平兼盛・たいらのかねもり
 - 2 Kaki[mo]moto-no-hitomara[o] 柿本人丸・かきのもとのひとまる
 - 3 Yoshinobu Ason(Otomo no Yoshinori) 大中臣能宣朝臣・おおなかとみのよしのぶのあそん
 - 4 Foujiwara(no)Toshiyuki(toshiaki) 藤原敏行・ふじわらのとしゆき
 - 5 Shinoju Nyogo(Saigu no Nyogo(?)) 斎宮女御・さいぐうのにようご
 - 6 Minamoto Kimitada 源公忠朝臣・みなもとのきんただのあそん
 - 7 Tchiunagon Tomotada 中納言朝忠・ちゅうなごんあさただ
 - 8 Foujiwara Takamitsu 藤原高光・ふじわらのたかみつ
 - 9 Ariwara Narihira 有原業平・ありわらのなりひら
 - 10 Sujo Hoshi 素性法師・そせいほうし
 - 11 Tchunagon Yakamochi 中納言家持・ちゅうなごんやかもち
 - 12 Mitsune Ootchikotchi 凡河内躬恒・おおしこうちのみつね
 - 13 Nakatsugu Foujiwara 藤原仲文・ふじわらのなかぶみ
 - 14 Mibuno Tadami 壬生忠見・みぶのただみ
 - 15 Foujiwara Moto... (?) 藤原元真・ふじわらのもとざね
 - 16 Gon Tchunagon Atsutada 権中納言敦忠・ごんちゅうなごんあつただ
 - 17 Tchunagon Kanesuke 中納言兼輔・ちゅうなごんかねすけ
 - 18 Mibuno Tadamine 壬生忠岑・みぶのただみね
 - 19 Minamoto no Shigeyuki 源重之・みなもとのしげゆき
 - 20 Minamoto no nobuaki 源信明朝臣・みなもとのさねあきら
 - 21 Minamoto no Sunao 源順・みなもとのしたごう
 - 22 Sojo Henjo 僧正遍昭・そうじょうへんじょう
 - 23 Onakatomi Yorimoto Ason 大中臣頼基朝臣・おおなかとみのよりもとのあそん
 - 24 Ono no Komatchi 小野小町・おののこまち
 - 25 Nakatsukasa 中務・なかつかさ
 - 26 Ki no Tsurayuki 紀貫之・きのつらゆき
 - 27 Sarumaru Dayu 猿丸大夫・さるまるだゆう
 - 28 Kiyowara no Motosuke 清原元輔・きよはらのもとすけ
 - 29 Isse 伊勢・いせ
 - 30 Yamabe no Akashito 山辺赤人・やまべのあかひと
 - 31 Ki no Tomonori 記友則・きのともりの

32 ?(Shotai Kun) 小大君・こおおぎみ

33 Sakanoue no Mitchinori 坂上是則・さかのうえのこれのり

34 Foujiwara no Sadakado 藤原興風・ふじわらのおきかぜ

35 Foujiwara no kiyotada 藤原清正・ふじわらのきよただ

36 Minamoto no mune...? 源宗于朝臣・みなもとのむねゆきのあそん

(注④) 今回使用したパソコン本体は、PC-386 (EPSON) とMacintosh IIVX (Apple) である。私は、文字データを扱う時はPCを利用し、画像と音声データはMacで処理をしている。周辺機器としては、ディスプレイ (SONY・GVM-1411) ・イメージスキャナ (EPSON・GT-8000) ・光磁気ディスク (ICM・MO-3120) ・レーザープリンタ (Canon・B406S) を使用している。また、これらはすべてPCとMacで仲良く共用している。各種データは、ケーブルでPCとMac間を相互転送している。キーボードとマウスが両機種で共用できたらと思う時がある。それは、筆者がキーボードで日本語を打つ時は、カナ入力を常用しているからである。Macのキーボードのカナ配列は、JIS規格とは異なっている。Macが先進的なパソコンであるだけに、今後は再考してもらいたいところである。

【謝辞】

『探幽筆 三拾六哥仙』の調査は〈八人会〉のメンバー (大森俊憲・公子、新谷栄一・香代子、井上大治・文、伊藤清子) の理解と協力によるものである。また、パリの書店との交渉にあたっては、川田隆雄・修、高野了吉各氏の、フランス語翻訳は橋本彰子氏の、英語翻訳は田中京子氏のお世話になった。記して感謝の意とさせていただく。